

明治時代の回遊式庭園にみる西洋の美的感性の影響

—無鄰菴を例として

Scorus Oana Loredana (京都大学)

本発表は、山縣有朋が七代目小川治兵衛に造園を命じた無鄰菴(明治27-30年作庭)を主な対象とし、先行する時代の庭園との比較考察を行なうことで、西洋の美的感性の流入が明治時代の回遊式庭園に与えた影響を考察するものである。無鄰菴は、それ以前の回遊式庭園に近い総合的な形態を持つ一方で、画期的な要素が多数導入されており、明治時代に現れた新たな庭園の形態を示すものである。

これまで造園学者の尼崎博正を中心に、明治時代の回遊式庭園の特色や築造過程については多くの指摘がなされてきた。しかしながら、明治時代の回遊式庭園に現れた新たな要素と明治維新前後に日本に輸入された西洋思想・美的感性との関係性は、十分に明らかとされていない。そこで、発表者はトマス・カスリスが『インティマシーあるいはインテグリティー——哲学と文化的差異』において提唱するインティマシーとインテグリティーの概念を用いた分析を行なうことで、この関係性を明らかとする。

カスリスの提唱するインティマシーとインテグリティーの概念は、ものごとが互いに関係する仕方を対比的に捉えるものである。本発表と関係する芸術の分野について述べれば、インティマシーの芸術は「自己と世界の本来的な重なり合いを表す」のに対し、インテグリティーの芸術は、「存在する自己と世界を個別に仲介し関連づける」とされる。またインティマシーの芸術家、「享受者、芸術作品は切り離せない関係にある」のに対し、インテグリティーの芸術作品は、「芸術家の意図ないし享受者の反応から独立し、それ自体の意味を持つ」とされる。カスリスは、日本文化の中心的な指向性はインティマシーであるとする一方で、近代以降の西洋の文化の指向性は、インテグリティーであると主張する。

この概念を用い、本発表では以下の考察を行なう。まず、先行研究を参照しつつ、回遊式庭園の新しい形態の始まりとされる無鄰菴にみられる画期的な要素を確認する。ここでは縮景、見立て、石組み、松といった伝統的な要素のかわりに導入されるものと、園外景観を持つ新しい役割を論じる。次にカスリスの思想を確認した後、特に芸術に関わる彼の概念に基づき、それぞれの要素の分析を行なう。この分析により、江戸時代の庭園における上述の伝統的な要素がインティマシーを指向すること、それに対して無鄰菴にみられる明治時代の画期的要素はインテグリティーを指向することを示す。この指向性の変化は、西洋の文化や思想の流入が日本庭園に与えた影響を反映したものと考えられる。

以上の考察により、これまで十分に論じられてこなかった、明治時代の回遊式庭園における西洋の新しい美的感性の浸透が明らかとなる。また山縣有朋が当時にあつては画期的とされる要素を選択した理由、そしてその要素が新興有産階級に広く好まれるようになった理由も解明される。